

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲	乙	第	号	氏名	小林周
論文審査担当者	主査	政策・メディア研究科委員	環境情報学部教授	清木 康		
	副査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部教授	神保 謙		
	副査	政策・メディア研究科委員	総合政策学部教授	廣瀬 陽子		
	副査	元・理工学部教授、現・理工学研究科非常勤講師	岡野 邦彦			
学力確認担当者：						
(論文審査の要旨)						
<p>小林周君提出の学位請求論文は「リビア内戦とサハラ砂漠周辺地域の不安定化：秩序の崩壊がもたらした『負の連鎖』の分析モデル構築」と題し、序章と終章に加えて本編 8 章からなる。</p> <p>本論文は、広大な空間における複合的・連鎖的な危機を読み解くための「負の連鎖」の分析モデルを構築・提案するものである。そして、2011 年のカザーフィー政権崩壊後に政治・治安情勢のリビアの不安定化、また、リビアの不安定化がサハラ砂漠周辺地域の政治・治安情勢に与えた影響についての分析モデルの適用による、モデル有効性の検証を行ったものである。</p> <p>北アフリカのリビアでは、2011 年の内戦以降に政治・治安情勢が不安定化した。同国の情勢は、石油生産量の乱高下、テロリズム、移民・難民や武器の拡散など、多岐にわたってリージョナル、グローバルな脅威をもたらしている。しかし、問題の複雑性と複合性ゆえに、包括的な分析はほとんどなされてこなかった。</p> <p>本論文の目的は、2011 年のリビア内戦以降に同国の政治と治安が不安定化した要因、リビア国内に過激派組織や武装勢力の活動拠点や移動経路が構築された要因、サハラ砂漠周辺地域の政治や治安情勢が不安定化し、非国家主体が活発化した要因を分析・解明し、サハラ砂漠周辺地域における不安定化の「連鎖」を断ち切り、地域の安定化に向けた課題を提示することである。</p> <p>本論文は、複合的、連鎖的な危機を説明する「負の連鎖」の分析モデルを構築し、リビア内戦とサハラ砂漠周辺地域の不安定化を事例として、本モデルの応用可能性を検証した。「負の連鎖」の分析モデルは、次の 3 要素からなる。(1) 環境の変化が、主体ないしは物体に作用し、従来にない規模や経路での移動・拡散をもたらす。(2) これが複数発生すると、移動した主体や物体が特定の空間で出会い、これまでにないパワーをもつ。(3) それによって生じた新たな環境の変化が、周辺の主体や物体に作用し、変化を生み出す。</p> <p>このような連鎖的かつ多次元的な問題を対象として分析・可視化を行うために、多次元的なマルチメディア・データベースシステムである 5D 世界地図システムを適用した。本研究では 5D 世界地図システムをグローバル・データベースとして活用するとともに、中東・北アフリカ諸国の不安定化を分析・可視化するための利用環境を構築した。</p> <p>本研究の主要な新規性および有用性は、「負の連鎖」の分析モデルによって、地域において発生している問題群と、それらの関連性や連続性を構造化・表現し、分析・可視化した点にある。また、本モデルの中に、国境を越えた「非統治空間」という枠組みを組み込み、気候変動・エネルギー問題という越境的・非人為的な事象を組み込んだ点にある。</p>						

本論文の主要な成果は、次の3点にまとめられる。

- (1) 「負の連鎖」の分析モデルによって、発生している問題群と、それらの関連性や連続性を構造化・表現し、「リビアの不安定化がサハラ砂漠周辺地域に波及した原因」という問いについての分析と可視化、さらに個々の事例分析を組み合わせた大局的分析を行った。
- (2) リビアを中心とした中東・北アフリカ地域の不安定化のプロセスと個々の事象の連鎖に関するマルチメディア情報を収集し、5D 世界地図システムの意味空間上に写像した。本研究で扱った複合的かつ多次元的な問題を描写・共有する上では、空間・時間・意味情報を埋め込むことが可能な 5D 世界地図システムが重要な役割を果たした。
- (3) リビアにおける内戦後の政治情勢について分析することで、国際政治・安全保障研究のための新しい方法論を示した。また、「非統治空間」および気候安全保障という概念を具体的な事例とともに検証することで、両概念の有効性を示した。

本論文は次の10章から構成されている。

序章では、「負の連鎖」の分析モデルを中心とした研究の枠組みについて説明し、研究の背景や先行研究の整理、論文構成を提示した。

第2章では、2011年のリビア内戦とカッザーフィー政権崩壊の過程を整理し、内戦によってリビア国内の政治、経済、社会情勢が変容したことを示した。本章は、リビアが不安定化する「負の連鎖」の前提となる環境、つまりリビアがどのように変化し、それによってどのようなアクターが影響を受け、連鎖が広がったのかを理解する上での基礎的な視座を提示した。

第3章では、カッザーフィー政権崩壊以降のリビアの不安定化について、新政権における政治対立、地域間対立、民兵組織の台頭という3つの要因を分析することで、「負の連鎖」にともなう非国家主体の台頭(=パワーの獲得)を示した。また、諸外国の介入や国連のリビア復興・安定化の失敗といった外部要因が、さらなる「負の連鎖」の要因となったことを示した。

第4章では、リビア内戦以降のイスラーム過激派組織の動向に焦点を当て、「負の連鎖」の中で彼らが様々な活動資源を獲得し、政府や国軍に対抗しうるパワーを得た過程と要因を分析した。分析を通じて、多くの過激派組織が国境横断的に活動しており、リビア内戦によって「負の連鎖」が国境を越えて拡大し、過激派組織の活発化の要因となったことを示した。

第5章では、「非統治空間(ungoverned spaces)」の議論に着目し、リビア周辺では中央政府による統治がおよばない空間が発生し、広大な地域の不安定化要因となっていることを示した。この問題を「負の連鎖」の分析モデルから、「非統治空間」の発生によって非国家主体が武器や人員、活動拠点といった資源を手に入れることで、従来にならぬ力を持ち、周辺諸国を不安定化させていることを論じた。さらに、サハラ砂漠周辺地域の「非統治空間」は他国の領域と「接続」して越境的に発生しており、一国内に限定して発生する「非統治空間」よりも解決が困難であることを指摘した。

第6章では、気候安全保障 (climate security) の議論に着目し、気候変動という越境的かつ非人為的な事象が、サハラ砂漠周辺地域の不安定化要因となっていることを示した。「負の連鎖」の分析モデルからは、気候変動という環境変化が主体・物体の移動や拡散をもたらし、それが地域を不安定化させていると分析できる。そして、問題解決のためには、災害や紛争に対する外部からの緊急支援や復興活動のみならず、気候変動に関する構造的な脆弱性を解消するための、現地主体での中長期的な施策が必要であることを論じた。

第7章では、5D世界地図システムを用いて、複合的・多次元的な事象の連関を定量的に分析する方法を提示した。まず、リビアの内戦と政治変動がサハラ砂漠周辺地域に与えた影響について、プロセスを時系列的に分析し、地図上に写像した。次に、中東・北アフリカ諸国におけるエネルギー需給と政治変動や紛争の相関について、時系列的变化と意味的变化を同時に可視化した。これらの分析によって、5D世界地図システムのデータ構造・情報空間・地理空間において複合的な事象の分析・可視化システム環境の構築を行った。これにより、分析結果を時空間的に可視化することが可能となった。

第8章では、「リビア政治合意」と選挙への取り組み、ハイブリッド・ガバナンスをめぐる議論、そして経済産業開発を事例に、リビア安定化の様々な取り組みとその課題を示した。2015年末に締結された「リビア政治合意」や国連主導で進められる選挙など、リビアの国家再建を目指して様々な取り組みがなされてきた。本章では、外部主導の政治プロセスが、リビアの統一と安定ではなくさらなる分断と不安定化を招く結果をもたらしたことにより、「負の連鎖」が拡大したことを示した。石油生産の安定と産業の多様化が、不安定なリビアの政治・経済にとって重要な課題であることを論じた。

終章では、本論文の各章の概要をまとめ、「負の連鎖」の分析モデルをまとめ、リビアの安定化に向けて国際社会が果たしうる役割、本研究分野における貢献と将来への展望をまとめている。

本研究は、「負の連鎖」の分析モデルを主要な提案とし、2011年の内戦以降のリビアの政治動向について領域・地域横断的にまとめた学術的成果である。これらの研究成果は、著者が、内戦後のリビアおよび中東・北アフリカ地域を対象として行った研究活動によって生み出した成果の集大成であり、中東地域研究、国際安全保障、国際政治、そして多次元空間データベース分野における貴重な研究成果として位置付けられる。

以上により、本論文の著者は、先端的研究を行うために必要な高度な研究能力、ならびに、その基礎となる豊かな学識を有することを示した。よって、本学位審査委員会は小林周君が博士（政策・メディア）の学位を授与される資格があるものと認める。